

わらび餅^{もち}

一

むかし京都^{きょうと}に、有明中将^{ありあけのちゆうじよう}という若いお公家^{くげ}さまがいました。中将^{ちゆうじよう}はとてもわらび餅^{もち}がすきで、毎日きままって、朝七つと、昼には十二、夜は九つというふう^たに食^たべていました。

毎年春先^{きたさが}になりますと、北嵯峨^{きたさが}の野はらへ人をやって、わらびをどっさりつませます。そのわらびを、ほしてたくわえておいて、年中餅^{もち}に入れてつ

かせるのです。

そんなに、わらび餅もちばかり食べている上にお公家くげさまのことで、少しも体を動かうごかすことがないものですから、始終しじゅう胃が悪わるくて、青ぶくれの顔をしていました。

ちゅうじょう

中将みは、まだ一人身みでしたが、こんど、権大納言藤原範季ごんだいなごんふじわらののりすえという人の

つきののまえ

むすめの月野前つきの前というおひめさまをおよめにもらいました。ところが、月

野前のまえは、名前のやさしいのとはあべこべにひどくこうまんこうまんな、ごうじょうごうじょうつ

ちゅうじょう

ぱりで、少しでも中将ちゅうじょうに気に入らないことがあると、ぽんぽんあたったり、やりこめたりしました。

それだけならまだいいのですが、こまつたことには、この奥方おくがたは、世よの

中で何がきらいといって、わらび餅もちくらいきらいなものはありませんでした。わらびと聞いただけでも、ふるえ上がるのです。これでは二人の間が、うまくおさまるわけがありません。奥方おくがたはとうとうある日、中将ちゆうじように、

「これからわらび餅もちは、一さいお上りになってはいけませんよ。」と、言いわたしました。中将ちゆうじようは、びっくりして、わらび餅もちが食べられないくらいなら、いつそ川へはまって死しんでしまおうと言いました。これには奥方おくがたもちよつとこまって、

「じゃあ、これからは、朝半分と、昼に三つ、夜二つならかんべんしてあげます。それより一口でも多くめしあがってはいけません。」としぶしぶこう言いました。

それからというものは、中将ちゆうじやうは、大すきなわらび餅もちが十分に食べられな
いものですから、いつもうかない顔ばかりしていました。そして、なぜわし
は中将ちゆうじやうなどに生まれついたのだろう、身分みぶんも何にもない百しようにでも生
まれていた方が、よっぽどよかった。そうすれば、だいいちあんな女と一し
よにならなくつてもすんだのだし、だれもとめるものがないから、食べたい
だけ、わらび餅もちを食べることが出来るできのにと、ためいきをつきつき、こう思
いました。

二

ある春の日、中将ちゆうじやうはめずらしく、気に入りの家来けらいを五、六人つれて、北
嵯峨野さかのへたかがりに行きました。ところが、むちゆうになってかりまわって

いるうちに、うっかり家来けらいたちにはぐれて一人になり、道が分からなくなつてしまいました。

ちゆうじやう中将はこまって、どこかに家でもないかとどンドン馬を走らせていくうちに、たった一けんたっている、小さなかや屋根やねの家のまえに來ました。声をかけますと、中から十五、六の女の子が出來て來ました。まずしい身みなりをしてはいますが、顔に品ひんがあつて、とてもきれいな女の子です。

ちゆうじやう中将は、つかれているから、少しやすませておくれとたのみました。女の子は、むさくるしい家ですけれど、ごゆっくりなすつて下さいましと言つて中へ通しました。そして、

「おなかがおすきではいらつしやいませんか。こんないなかで、お口にあう

ようなものはございませんが、ちようど今わらび餅もちをこしらえたところでございます。一ついかがでございます。」と言います。中将ちゆうじやうは、わらび餅もちと聞くと大よろこびで、とても大こうぶつだから、ごちそうしておくれと言いました。

女の子は、大きなはちにわらび餅もちを山のようにもって、もって来てくれました。中将ちゆうじやうはかたはしから、どんどん食べて、とうとう出されただけを、みんな食べてしまいました。女の子は、にこにこして、

「まだ、あちらにどっさりございますが、もつともってまいりましょうか。」と聞きます。中将ちゆうじやうは、

「いいや、もう十分にごちそうになって、おなかがぼこぼこだ。それはそう

と、おまいの親は、何という人か。」とたずねました。すると女の子は、

「私には親も姉妹きょうだいもなにもございません。ほんの一人ぼっちでございます。」

と答えました。中将ちゅうじょうは、

「へえ。こんな野原の中に一人でいてよくさびしくないね。」と、びつくりして言いました。この子は、今はおちぶれていても、もとはきつと、身分みぶんのある人のむすめだったのだらうと中将ちゅうじょうは思いました。

中将ちゅうじょうは、じつと女の子を見ているうちに、あああ、じぶんの奥方おくがたが、この子のように、すなおな女で、まい日おいしいわらび餅もちを食べさせてくれたらなあ、と、ひよいところ思つて、ためいきをしました。

すると、女の子は、ふしぎそうに、何をおなげきになるのでございますと

聞きました。それで中将ちゆうじやうは、これこれで、うちで、思うぞんぶんもちにわらび餅もちが食べられないでこまるということを話して聞かせました。すると女の子は、にこにこしながら、

「それではわたしが、いいおまじないを、おしえてさし上げましょう。おやしきへお帰りになりましたら、口の中で、わらびもちわらびもちわらびもちと三べんおとなえになって、奥方おくがたのお鼻はなを、ちよいとおつつきなさいまし。そうすれば、あしたの朝は、きつと奥方おくがたに、ききめがあらわれてまいります。

少しききめが強すぎるかもしれませんが、三日たちませば、何のこともなくなりすからだいじょうぶでございます。」とこんな、なぞみみたいなことを言います。

「おい、じょうだんもいかげんにせよ。」と中將ちゆうじやうはわらいました。すると、女の子は、まじめくさって、

「いいえ、じょうだんではございません。そのまじないをなさいませば、これから先、わらび餅もちをめし上りほうだいにめし上れるようにおなりになれます。」と言います。中將ちゆうじやうは、

「それではおまいの言うことを一つためしてみよう。」と言って、京への道を聞きますと、女の子はくわしく教えてくれました。

中將ちゆうじやうは門口かどぐちへ出ますと、送って出た女の子に、どうだい、おまいはおれのやしきへほうこうする気はないかと、聞きました。すると、女の子は頭をふって、

「いいえ、わたくしは後一月もたちますと、遠い国へまいらなければなりません。でも来年の今じぶんには、またこちらへ帰って来ますから、そのときには、ぜひお遊びにおこし下さいまし。」と言いました。

中将ちゅうじょうは帰りがけに、こんどあの家うちをたずねるとき、まよわないようにと思つて、道ばたの木にしるしをつけつけて行きました。少し行くと、はぐれた家来けらいたちがとんで来て

「おとのさま、いったいどちらにおいでになったのです。」と、ふしぎそうにたずねます。中将ちゅうじょうが、これこれだと話しますと、家来けらいたちは口をそろえて、

「ごじょうだんをおっしゃいます。そんな野中のなかの一けん屋やに、女の子が一人

でいるわけがございますものか。」と言つて、どうしても本当にしませんでした。

三

ちゆうじよう 中将はやしきへ帰りますと、女の子の言つたことをためして見ようと思つて、わらびもちわらびもちと三べん口の中おくがたとなえて、奥方の鼻はなをちよいとつつつきました。

「まあ、何をなさるのです。いやな方。」と、奥方おくがたはぷりぷりおこりました。
あくる朝ちゆうじよう、中将は起きるとすぐに、奥方おくがたの部屋へやへ行つて見ました。すると、奥方おくがたはとこの中で、白いきぬのきれを顔にあてて、おんおんかなっています。おつきの女たちも、目をまっ赤かになきはらしています。

「おいおい、どうしたのだ。」と中將ちゆうじようが聞きますと、奥方おくがたは顔にきぬをあてたまま、

「あたしは今日はとても気分が悪いので、一日休いちんちみます。早くあちらへ行つて下さいまし。」と、なきじやくりをして、言います。

中將ちゆうじようは、顔にきれをあてているのは何のわけだろうと思って、そのきれを取ろうとしますと、奥方おくがたは、ひっしになって、どうしても取らせません。それをむりやりに取りのけてみますと、おどろいたことには、奥方おくがたの鼻はなに、大きなわらび餅もちがくつついているのです。奥方おくがたは、おんおんなきたてながら、「今朝目けさめがさめると、何だか鼻はながむずがゆいので、手でさわってみたら、へんなものがくつついていて、いくらひっぱっても取れないのです。あなた、

早くおんみようじをよんで、うらなわせてみて下さいまし。どうしてこんな目にあうのでしょうか。」と言いい言いなきつづけけます。

ちゅうじょう

中将は、女の子から、三日たてばなおると聞かされているので、心配するどころか、おかしくって、くつくつとわらいました。すると奥方はおこって、かみの毛をかきむしりながら

「ああ、くやしい。あなたは何てひどい方でしょう。あたしがこんなすがたになっても平気へいでいらつしやるのですか。」と、おんおんなきたて

ちゅうじょう

ます。中将は、



おんみようじ……
らないやおはらい
の仕事をする人

「いや、悪かった悪かった。今すぐ、おんみようじをよぶからね。」と言つて、そのころ都みやこで名だかい、安部あべ晴明せいめいという人をよびにやりました。晴明せいめいが来ますと、中将ちゆうじようは一間ひとまへよんで、奥方おくがたの前では、これこれこう言つて、それからああ言つてくれと、こつそりたのみました。晴明せいめいは、奥方おくがたの部屋へやへ入りますと、中将ちゆうじようにたのまれたとおりに、

「奥方おくがたさま、あなたさまのこのふしぎなびようき病気は、みんなわらび餅もちのたたりでございます。あなたさまが、ふだん、わらび餅もちをひどくおきらいになりますと、また、中将ちゆうじようさまに、わらび餅もちを十分お上げになりませんのとその二つで、わらび餅もちのうらみが、あなたさまのお鼻はなへとりついてこんなことになつたのでございます。

これからは、中將ちゆうじやうさまに、いやというほどわらび餅もちをおさしあげになることを、おちかいなさいまし。そうしませば三日の後には、わらびのうらみは消えきまして、もとのとおりのお鼻はなになります。」と言いました。奥方おくがたは、「あたしは今始めて、わらびのたたりのおそろしいことが分かりました。これからはあの方に、わらび餅もちを、おあきになるほどさし上げます。」と、しみじみ言いました。中將ちゆうじやうはうまくいったので、ほくほく大よろこびをしました。

四

清明せいめいが帰りますと、奥方おくがたはすぐ女たちに言いつけて、わらび餅もちをどっさりこしらえさせて、

「さあ、お上がり下さいまし。もつともつとお上がり下さいまし。」と
言つて、ちゆうじよう中將に食べさせました。

三日目の朝になりますと、おくがた奥方の鼻のわらび餅は、もちころりととれてしま
いました。それから、ちゆうじよう中將は、むかしまた昔どおり、朝七つと、昼十二、夜九
つのわらび餅をもち食べつづけました。

ところが、おかしなことには、あれほどわらび餅のもちきらいだったおくがた奥方が、
それからというものは、だんだんわらびもちがきらいでなくなったばかりか、
後にはちゆうじよう中將にもましたわらび餅もちずきになりました。そして、毎日朝九つ、
夜十二、昼には十七も食べて、ちゆうじよう中將をびつくりさせました。

そんなわけで、ふうふ夫婦のなかもそれはよくなりました。あくる年の正月には、

奥方おくがたにはわらび餅もちみたいに、まんるい顔をした、いい若君わかぎみが生まれました。

五

やがて、ぽかぽかした春になりました。中将ちゆうじようは、あのふしぎな女の子に会って、お礼れいを言おうと思つて、ある日四、五人の家来けらいと一しよに、北嵯峨野きたさかのへ出かけました。

そしてこの前道ばたの木につけておいた、しるしをたどりたどり行つてみましたが、あのかや屋根やねの家はどこにも見あたりません。

家はたしかこのへんだつたと思われるところに一むらむらのわらびが青々とのびしげっていました。

「ふふん、それでは、あの女の子は、わらびのせいだつたのだろう。ただの

人間ではないと思った。」

ちゆうじよう

中将は一人でそう言っ

「わらびよ、お前だったのか。ありがとうありがとう。」

とわらびに向かって、心からお礼れいを言いました。
